

歴史紀行

なごや

# 幻の古代道路を追って

池田 誠一

## ■【2】条里制の道…津島から萱津へ■

### ① 東に向う三本の道

津島付近に上陸し馬津駅を通った古代の道は、東の萱津に向かって、どこを通過していたのでしょうか。海部郡の平野は、古代には大規模な条里制が実施されていました。広く尾張地方の条里制を分析した水野時二氏はその範囲を、江戸時代の佐屋路付近までと想定しています(図1、文献①)。

条里制の道と古代の幹線道路とは密接な関係がありました。全国での発見事例では条里制に沿って道路が通っている例が多いのです。その面から考えると、条里の道とされる①津島街道(以後、上街道)の木田と甚目寺の道、②佐屋路(以後、下街道)の神守から大治への道などは、古代道路の候補だと考えてもよいでしょう。

また、この区間には、もう一つ候補とされている道があります。それは①の1\*<sub>0</sub>ほど北



図1 海部郡の条里跡。メッシュが条里の想定される地域(文献①)

側になります。旧の海部郡と中島郡の境、今日で言えば美和町と稲沢市の境を通る、通称③「海部の古道」とされる道です(清洲街道とも)。この辺りは先史時代の海岸線とされ、古墳や古い史跡が線状に並んでいるのです。

今回は、これら三本の道を調べつつ、古代道路の道影を追ってみたいと思います。

## 2 津島から萱津へ

### (1) 条里制と古代道路

わが国の古代は、律令制の中で、耕地を国民に平等に分け与える班田收受の法が実施されていました。そのために耕地を分かりやすく縦横に区画し、条と里に分けたのが条里制です。その地域は今日にも多くの痕跡が残っており、広く全国で実施されていたことが分かっています。

そしてこの条里制の区画と古代道路とは密接な関係が有ることが、全国の古代道路の発掘で確かめられてきました。それは道の方向と用地で、条里制の区画線と道路の方向が一致しており、また用地は区画割の余剰部分になっていることが多いのです。言い換えれば、そのような所では古代幹線道路を基準にして条里制が行なわれたともいえます。

一般に、古代道路を探すには、歴史的な文献調査や考古学的な発掘調査と並んで、道路が「直線で広い」という特徴を活用します。このため、古い地籍図や行政区画、さらには航空写真などから、直線が連続する区間を探し出し、そこに15 $\mu$ mほどの幅を想定することになります。

津島から萱津にかけては、前述のように条里制の遺跡が多く見られ、上街道①と下街道②の間の距離も、2.6 $\mu$ m(約24町)と条里の4里分にな

ることが確かめられています。掘削調査の例が無い場合条里余剰地の確認までは至っていませんが、二つのまっすぐな道は古代東海道の有力な候補でしょう。

### (2) 海部の古道(清洲街道)

海部地方の古代遺跡を見るともう一つの線が浮かび上がってきます。それは海部郡の北、中島郡(今の稲沢市)との境に連なる遺跡群です(図2)。古墳を例にとってみても、

- ・蓮華寺(美和町蜂須賀)円墳(推定)
- ・富士社(稲沢市麻績)円墳
- ・富士社(稲沢市込野)円墳
- ・神明社(美和町二ツ寺)前方後円墳

と、ほぼその線上に集中しているのが分かります。この遺跡群を結んでいる線が③の海部の古道とされる道です。そしてその西の起点はやや南に下がりますが、

・奥津社(愛西市千引)円墳  
ということになるようです。

しかし、古墳時代はともかく、条里制の時代にはこの道のかなり南まで条里が設定されています。従って、奥津社はともかく、幹線道路がこの位置まで遡る必要はなかったのではないのでしょうか。



図2 美和町と稲沢市の境に集中している古い史跡。濃い部分は微高地。(美和町資料に追加)

### (3) 下街道(佐屋路)

南限と考えられる②の下街道はどうでしょうか。この道は江戸時代には佐屋路として利用されました。条里の遺跡としてはさらに南に富田荘がありますが、ここの条里は他の海部郡の条里と方向が5度ずれており、やや遅れて条里制に倣って造られたもののようです。

この街道は、前回の馬津駅の想定位置や菅津の渡し位置から見ると、やや南に振れています。また当時の海岸線は部分的にはもっと北に入り込んだ所があったようで、古代の幹線道路の想定には無理がありそうです。

### (4) 三本柿街道

以上の説明からは①の上街道が有力になります。しかし上街道も、津島付近は川の流路の関係で中世になって今の道筋になったと考えられています。そしてその前は、近世まで残っていたという三本柿街道と呼ばれた道ではないかとされるのです(文献②)。

三本柿とは東の木田の付近にあった1本で3種の実のなる柿の木のことです。この道は中世は津島から上街道に繋ぐ近道として利用さ

れていたようです。そのルートは、「佐織町史」では、津島の小沼口から、見越・根高・諏訪・北河田・古瀬・千引・葉刈・佐折・森山と紹介されています。このルートはその村名を追っていくと、条里跡を西側に延長した部分を通り、条里想定線を曲がりつつ通過するのです。そして、その条里の道を西へ延長した先に、前回想定した「馬津駅」の松川や北口(北町)があることとなります(図3)。

## 3 紀行 条里の道跡

… 勝幡から甚目寺へ …

それでは、この勝幡付近を通る三本柿街道を探して条里制の跡を追い、木田で上街道に出て、甚目寺まで歩いて見ましょう。

#### 〈条里の道〉

勝幡は、中世、織田信秀が城を築き、信長が生れたとされる城で有名です。城跡は川の流路の変更もあって今日ではイメージが湧きませんが、石碑が二つ建っています。

さて、条里制の道の跡を訪ねて、まず名鉄勝幡駅の南1<sup>km</sup>程の千引町奥津社を訪ねます。



図3 津島から東への条里に沿った古代道路の推定(太線)。近世に三本柿街道とされた区間



古墳上に建つ奥津社。三角縁神獸鏡が見つかった

駅の踏切を渡り、2つ目の信号を右に曲がります。次の信号を左に曲がって橋を渡った向こう側です。奥津社は古墳の上にあります。昭和51年、この社の宝物の中から3枚の三角縁神獸鏡が見出されました。社の前の道は上街道の線から6町(約650<sup>歩</sup>)南の、条里の道に相当します。

東に進み日比川の手前を左に曲がります。この辺りが葉苺町です。北に、突き当りを右にそれて進むと佐折町です。水路を渡って2本目の道が、上街道に続く条里の道に相当します。右に曲がり200<sup>歩</sup>程で青塚橋を渡ると、橋からは再びまっすぐな道が東に続いています。道は青塚駅から南に来た所で突き当ります。そこには八ヶ川が流れており、南に橋を渡って迂回するとまた東に続く道があります。しかしすぐ水路だけの道になり通過できません。すぐ右側の道に迂回して跡を追うと、3本目で突き当たった所のすぐ北に、カーブし



条里の筋に沿ってまっすぐつけられた道。青塚橋を望む



わずかに残った三本柿街道？

た未舗装の道が現れます。三本柿街道は、近世には集落の間を縫う曲がりくねった道に変わっていました。しかしそれも近代の耕地整理で消えました。しかし、唯一残ったのがこの道のような道です。それはこの道が町や大字の境のため耕地整理の境にもならざるを得なかったからでしょう。その草に覆われた道を進むと西尾張中央道です。

北に迂回して先ほどの道の延長上を進みます。始めはカーブしていますがすぐ東西の直線になります。この辺りから、道の右側に気になる空間が現れます。少し行くと藤の植えられた帯状の公園になります。古代道路は幅が広がったため現道路との差の部分が帯状の空間となって残ることがあるからです。地元の人に聞くと水路を暗渠化した跡だということですが、どうして広い空間ができたか、気になるところです。道は少し行って突き当たり木田の街になります。左に名鉄線を渡ると上街道で、右に古い町並みをカーブして進むと木田駅前です。

#### 〈津島上街道〉

木田駅前からは上街道が条里制の道になります。まっすぐな道が東に続きます。視界が遮られるのは河川の堤防です。金岩、木折、富塚と、広くなったり狭くなったり、またやや右に振れたり左に振れたりしますが、大枠ではまっすぐ続いています。周囲は、条里制がかすかに残る田園と点在する住宅です。木



まっすぐに延びる津島街道

田から1<sup>km</sup>半ほど進んだ所から左側の富塚は条里制の区画が今日もよく残っていることで有名です。

木田から2.5<sup>km</sup>ほど続く直線道路が右に曲がる手前を左に行くと、600<sup>m</sup>程先に古刹の法性寺があります。気になるのはその裏に、平安時代の小野小町の持念仏が掘り出されたという小町塚、安倍清明の術を称えた清明塚があることで、全国に数多い伝説地とはいえ古代道路の存在を感じさせてくれます。

元の街道に戻ると、道は右に左にとカーブして甚目寺の南大門の前に出ます。597年、甚目(はだめ)龍麿がこの東南200<sup>m</sup>付近の海から拾い上げた、仏教渡来の3仏像の一つと



甚目寺の南大門。

まっすぐ南(手前)に条里の道がつづいている

される黄金の聖観音菩薩。入り江の北に建てたのが甚目寺の起こりとされ、7世紀前半の瓦が出土しています。重文の南大門は1196年、將軍頼朝の命をうけ梶原景時が落成させました。本堂に参って、これも重文の東門を抜けると、上街道は次の拠点・萱津に向けてほぼ条里の跡をまっすぐ東に続いています。

## 4 条里をゆく道

今回の津島から萱津に向けての区間は、壮大な条里の道跡を辿ることになりました。少し気になるのは、佐折町付近で条里を南北に渡る所と甚目寺の迂回です。はたして直線指向の道路が鍵の手に迂回したのでしょうか。その面によく似た例が下街道、佐屋路の神守の所がありました。神守宿はちょうど条里を南北に一里分渡る所に設けられているのです。

甚目寺と条里と古代東海道。どれが先にできたかという問題もありますが、いずれにしても松川から萱津への古代道路はそれらと調整しつつ造られていたのではないのでしょうか。

〈主な参考文献〉

- ①水野時二『尾張の歴史地理(上)』  
(1959、名古屋鉄道 KK)
- ②森 平『津島の歴史』  
(<http://nagoya.cool.ne.jp/yomagi/>)
- ③飯田守『津島上街道』  
(2004、ブックショップ「マイタウン」)

法性寺の裏手にある清明塚

